

Contents *****

特集：石破新内閣への個人的観測	1p
＜海外報道ウォッチ＞	
石破新総裁はどう報じられたか	7p
＜From the Editor＞ 副大統領候補討論会	9p

特集：石破新内閣への個人的観測

先週の自民党総裁選（9/27）からわずか1週間。政界の変化はまことに急であります。本日は所信表明演説。来週9日に衆議院解散。そして15日には衆院選公示、そして27日には総選挙です。もっと時間をかけてくるかと思ったのですが、石破茂新首相は現実的な選択をしたようです。今から23日後が投開票日となります。

ということで、今週は新内閣が発足しました。非主流派中心の組閣、首相発言による株価や為替の変動、そして安保専門家を動揺させた「ハドソン論文」など、「ツッコミどころ」には事欠かきません。内閣支持率のデータも出始めていますので、総選挙の行方も気になるどころ。この政権に対して、遠慮なく私見を述べてみたいと思います。

●またしても総裁選は「ドラマ」だった

9月27日の自民党総裁選は史上初の「派閥抜き」だったが、「自民党の知恵」は健在であつた。当日の議員票と党員票は、またしても味わいのある数字が並び、自民党のお家芸ともいえる「1位2位逆転劇」が発生した。ただし9人もの候補者が競い合った後では、「求心力の高い新総裁誕生」とはならず、党内に対立を抱えた状態が続きそうだ。

しみじみ思うのだが、自民党総裁選は世界の民主主義国の中でも「世界文化遺産」みたいな存在であろう。まず、今どき記名式で投票しているところが珍しい。それを投票した全員が見ている前で、黙々と開票作業するのも美しい伝統である。これなら「陰謀論」も出にくいだろう。なにしろ「紙の投票用紙」という証拠物件が残っている。

決選投票における逆転劇は「民意に反する」と言われそうだし、「女性候補を選べない日本」という批判もあり得るところだ。それでも長らくこの方式に慣れてきた身としては、「ああ、今回も納得のゆく結果だった」と感じた次第である。

選挙に透明性や公平性を求めるのであれば、一発勝負の直接民主制が適していよう。米

国大統領選挙がその典型である。日本でも知事選挙は直接民主制だが、その結果に皆が満足しているかと言えば、それは別問題であろう（例：兵庫県知事）。「自分で選べる」ことの値打ちは大きい、メニューの細部まで客が選べる店において、出てくる料理の満足度が高いとは限らないのである。

間接民主制には一種のブラックボックスがある。自民党総裁選は現職の議員と党員たちだけで決めているわけなので、一般人から見ればかなりいかがわしい。それでもメニューが「おまかせ」一択の鮨屋のように、料理の満足度はそれほど低くなかったりする。自分より詳しい他人に選択を任せるのは、そんなに悪い手ではないのである。

要するにグレーの部分を残しておく、というのが日本の議会制民主主義における一種の知恵である。これに対して米国では、戦後に予備選挙というシステムを導入し、「政党が候補者をコントロールできない」ようにしてしまった。すべてを民意に委ねることが正しいと思ったのである。その結果として、今や誰もドナルド・トランプを止められなくなってしまった。いわば透明性のコストと言えらるだろう¹。

その点、自民党総裁選の歴史は怪しげなストーリーに満ちている。今回も「3人のキングメーカーの暗闘」という伝説が残った。岸田前首相が大勝利、菅元首相はまあまあ、そして麻生元総理は大敗である。こんな風にして、総裁選の前後で党内秩序が変わる。こういう戦いを繰り返すことで、自民党は組織を活性化させてきた。政府レベルでいえば、「疑似政権交代」によって支持率を回復してきた。

もっとも「総裁選マジック」が今回も有効かどうかは、今月 27 日に行われる総選挙の結果を見なければわからない。岸田首相としては 8 月 14 日の不出馬宣言は、いわば「捨て身のプラン B」であった。そして今後の日程はまことに急である。10 月 11-12 日には外遊日程も入るので、総選挙まではほぼ一直線である。

○今後の政治外交日程

10 月 4 日	石破首相が所信表明演説
10 月 7-8 日	各党代表質問
10 月 9 日	衆議院解散
10 月 11-12 日	ASEAN 関連会議 （ラオス） →石破首相が出席。日韓首脳会談など？
10 月 15 日	衆院選公示
10 月 22-24 日	BRICS 首脳会議 （露・カザン）
10 月 27 日	衆議院選挙＋参院補欠選挙 （岩手）
11 月 5 日	米大統領・連邦議会選挙 →「もしトラ？ or もしハリ？」
11 月 11～29 日	COP29 （アゼルバイジャン）
11 月中旬	特別国会召集 ？→新内閣発足→予算編成へ
11 月 17-18 日	APEC 首脳会議 （ペルー）
11 月 18-19 日	G20 首脳会議 （ブラジル） →日米首脳会談など？

¹ 話が飛躍するが、金融政策における「ドットチャート」も外部からの透明性を高めるための工夫が、政策決定者の自由度を下げている点では同様のトレードオフが存在すると思う。

●「残り物に福」はあるのか

今月1日に誕生した石破茂新首相は、自民党の過去の歴史では三木武夫首相（1974-76年）を彷彿とさせる。田中角栄内閣の金権体質を非難された自民党が、「椎名裁定」という裏技で選出した非主流派の総理総裁である。石破氏も自民党の危機に際して、5度目の総裁選出馬で初めての勝利を得た。党内基盤が弱い点も共通している。

三木氏は「バルカン政治家」と呼ばれ、目まぐるしく敵味方を作って政界を遊泳してきた。それでは石破氏はどうだったか。過去の総裁選における石破氏の「1勝4敗」の歴史を振り返ってみると、「20人の推薦人」がどんどん入れ替わっていることに気が付く。「白雲悠々、去りまた来る」（諸葛孔明）といった風情がある。

○石破茂氏、過去5回分の推薦人名簿

	2008年	2012年	2018年	2020年	2024年
勝利者	麻生太郎	安倍晋三	安倍晋三	菅義偉	石破茂
その他対抗馬	与謝野馨 小池百合子 石原伸晃	石原伸晃 町村信孝 林芳正	なし	岸田文雄	高市早苗 小林鷹之 林芳正 小泉進次郎 上川陽子 加藤勝信 河野太郎 茂木敏充
推薦人代表	鴨下一郎（津島派）	鴨下一郎（無派閥）	尾辻秀久（竹下派）	鴨下一郎（石破派）	岩屋毅（無派閥）
選挙責任者	小坂憲次（津島派）	梶山弘志（無派閥）	古川禎久（石破派）	山本有二（石破派）	青木一彦（無派閥）
推薦人	赤沢亮正（無派閥） 伊藤達也（津島派） 今津寛（津島派） 小淵優子（津島派） 大塚高司（津島派） 岡下信子（津島派） 岡本芳郎（津島派） 木村隆秀（津島派） 倉田雅年（津島派） 竹下亘（津島派） 渡嘉敷奈緒美（津島派） 西銘恒三郎（津島派） 橋本岳（津島派） 林田彪（津島派） 原田憲治（津島派） 平口洋（津島派） 佐藤正久（津島派） 田村耕太郎（津島派）	石田真敏（山崎派） 後藤田正純（無派閥） 齋藤健（無派閥） 田村憲久（額賀派） 平将明（無派閥） 竹本直一（古賀派） 橋慶一郎（無派閥） 谷公一（伊吹派） 中谷元（古賀派） 永岡桂子（麻生派） 山口俊一（麻生派） 山本拓（無派閥） 石井浩郎（額賀派） 片山さつき（伊吹派） 小坂憲次（無派閥） 佐藤正久（額賀派） 中西祐介（麻生派） 三原じゅん子（無派閥）	石井準一（竹下派） 松村祥史（竹下派） 青木一彦（竹下派） 島田三郎（竹下派） 舞立昇治（石破派） 中西哲（石破派） 村上誠一郎（無派閥） 中谷元（谷垣G） 渡海紀三朗（無派閥） 橋慶一郎（無派閥） 伊藤達也（石破派） 田村憲久（石破派） 赤沢亮正（石破派） 平将明（石破派） 福山守（石破派） 田所嘉徳（石破派） 神山佐市（石破派） 富樫博之（石破派）	門山宏哲（石破派） 八木哲也（石破派） 山下貴司（石破派） 後藤田正純（石破派） 舞立昇治（石破派） 中西哲（石破派） 村上誠一郎（無派閥） 中谷元（谷垣G） 渡海紀三朗（無派閥） 橋慶一郎（無派閥） 伊藤達也（石破派） 齋藤健（石破派） 赤沢亮正（石破派） 平将明（石破派） 福山守（石破派） 三原朝彦（竹下派） 神山佐市（石破派） 富樫博之（石破派）	赤澤亮正（無派閥） 泉田裕彦（無派閥） 伊東良孝（二階派） 小里泰弘（無派閥） 門山宏哲（無派閥） 平将明（無派閥） 橋慶一郎（無派閥） 田所嘉徳（無派閥） 谷公一（二階派） 富樫博之（無派閥） 長島昭久（二階派） 細野豪志（二階派） 村上誠一郎（無派閥） 八木哲也（無派閥） 保岡宏武（無派閥） 藤井一博（無派閥） 舞立昇治（無派閥） 山田俊男（旧森山派）

それというのも、今回の石破内閣の閣僚人事は評判が悪い。「無所属だらけ」「非主流派の在庫一掃」「12年間の鬱憤を晴らす内閣」（©岸田前首相）などの声がある。ただし上記の人の出入りを振り返ると、「最後まで尽くしてくれた人には報い」「途中で去って行った人には冷たい」という今回の人事は、やむを得ぬことなのかなと思えてくる。

何しろ石破氏の初当選は、中選挙区制時代の 1993 年である。田中角栄氏の薫陶を受けて政界入りし、小沢一郎氏と共に内閣不信任案を出して離党し、竹下登氏のとりなしで復党した。世が世なら経世会の本流となるべきところ、派閥政治を批判して無派閥となり、そこから自前の派閥を立ち上げ、それも自分の手で解散して今日に至っている。つくづく途方もない歴史を背負った人物なのである。

願わくばその経験値が、日本政治のために活かされてくれればいいのだが。

● 「ベテラン防衛族」は安全保障論は素人か？

ところで先週末、SNS 界限で何やら国際政治学者たちが騒がしいな、と思っていたところ、話題の中心は石破氏の「ハドソン論文」であった。筆者も読んでみて驚いた。これに比べれば、株式市場における「石破ショック」などいかにほどのことでもない。

ワシントンのシンクタンク、ハドソン研究所の HP に、9 月 25 日付でこんな論文が掲載されていた。”**Shigeru Ishiba on Japan’s New Security Era: The Future of Japan’s Foreign Policy**” (石破茂「日本の外交政策の将来」)²。主張のポイントは、①アジア版 NATO の創設、②国家安全保障基本法の制定、③米英同盟なみに日米同盟を強化する、という 3 点で、石破氏がよく演説で語っている内容である。

が、読んでみるとこれがひどいのだ。アジア版 NATO の部分では、「集団的自衛権」と「集団安全保障」の概念に混乱がみられる。米国の集団的自衛権に不信があるから、中国の脅威に対してアジア版 NATO が必要と言っているのだが、本家の NATO は集団安全保障ではなく集団的自衛権である。なおかつ、アジア版 NATO をどの国が望んでいるのか、理解不能である。米国は黙殺するだろうし、東南アジアの国々も「勘弁してくれ」と言うだろう。とりあえずインドは早々と「入らない」ことを宣言している。

続く②は国内的な法律論議であるから、わざわざ外国のシンクタンクに向けて発信する意図が不明である。まるで社内の組織変更を、わざわざテレビ CM で宣伝している会社のようなカッコ悪さを感じる。

③の部分はまだ理解できるが、これは 2001 年のアーミテージレポートの頃に流行った議論である。安保法制 (2015 年) や防衛 3 文書 (2022 年) を経た今の日本の防衛政策は、もうちょっとレベルの高いものになっているはずである。ベテラン防衛族である石破氏は、実は国際政治や安全保障論をよく理解していないのではないか？

何よりこれを書いた人物が、日本国首相になってしまったという展開に、ワシントン在住の日本人安保専門家たちが困り果てていると思う。説明を求められても、答えようがないではないか。本号の「海外報道ウォッチ」(P7-8) では、「優等生・岸田の次の首相は『日本版ドゴール』かもしれない」という報道を紹介している。米国側としても「いつかはそういうタイプが来る」という覚悟はあったらいい。しかるにこれでは拍子抜けしてしまうのではないだろうか。

² <https://www.hudson.org/politics-government/shigeru-ishiba-japans-new-security-era-future-japans-foreign-policy>

新政権の発足直後に発信された英文による安全保障論文としては、**2012年12月の安倍晋三氏による「アジア安保ダイヤモンド構想」がある。**”Asia’s Democratic Security Diamond”という論文は、今でもちゃんと Project-Syndicate のサイトに残っている³。

安倍氏が提唱した日米豪印のダイヤモンド構想は、戦略構想として優れていただけでなく、後に”Quad”（日米豪印首脳会議）として結実した。それに比べると、このハドソン論文はいただけない。これでは「安倍氏のライバル」という名が泣くというものだ。

●石破新内閣と解散・総選挙の行方

さて、問題は間近に迫った解散・総選挙である。たまたま目についた共同通信社の世論調査は以下の通り。**内閣支持率は 26.1%から 50.7%に倍増し、「総裁選マジック」は健在なようである。**政党支持率、比例投票先の数字も上昇しており、逆に野党は伸び悩んでいる。ここまでは「してやったり」だろう。

○共同通信社世論調査（2024/10/1-2）

※（ ）内は岸田政権末期の 8/19-20 との比較

支持	50.7 (26.1)	不支持	28.9 (67.4)
	政党支持率		比例投票先
自民	42.3 (36.7)		38.4 (37.1)
立憲	11.7 (12.3)		16.5 (15.2)
維新	5.4 (8.5)		7.8 (8.4)
公明	4.1 (4.2)		3.6 (3.5)
共産	4.0 (4.2)		3.8 (4.1)
国民	3.9 (2.8)		3.5 (3.0)
なし	18.6 (17.8)		18.0 (19.7)

しかしここへきて出始めたのが、**「石破さんは現実に流されている」という指摘**である。これまで総裁選の討論会などで言っていたことと、総理大臣になってからの発言に齟齬があり過ぎるのである。

- * 「解散前に予算委員会を開いて野党と議論する」と言っていたが、実際には最短日程である 10月9日解散→10月27日総選挙を選択した。
- * 総選挙に際し、「裏金議員」の公認/非公認を精査すると言っていたが、**現在の日程ではその時間的余裕があるとは思えない。**
- * アベノミクスに批判的で、金融正常化を支持していたはずなのに、10月2日に日銀の植田総裁との会見後に、「追加の利上げをするような環境にあるとは考えていない」と記者団に語る。これに伴って円安、株高が進行。

³ <https://www.project-syndicate.org/magazine/a-strategic-alliance-for-japan-and-india-by-shinzo-abe>

これまでの石破氏は、「常に少数派だが、正論を吐く逃げない政治家」という路線が売
りだったはず。党内の同調圧力に負けてしまう総理大臣では、支持者の失望を招くのでは
ないか。おそらく野党やメディアも、かきかかかって批判してくるだろう。

●「石破長期政権」は可能か？

ただし筆者は、石破内閣にはもう少しチャンスがあるようにも感じている。

石破氏の人気とは、かならずしも硬派なイメージだけではなく、「世渡り下手で、不器
用な地方出身政治家」への判官最良的な要素も強かったはずである。「鉄道オタク」「ア
イドル好き」といった政治家らしからぬキャラも、愛されてきた理由であった。そうでな
ければ、「議員仲間に嫌われつつも、全国の黨員には人気」という状態をこれだけ長くは
維持できなかつたはずである。

とりあえず、「地方の石破人気」は不変なのではないだろうか。個人的には「自民党の
単独過半数」は微妙でも、与党の過半数はクリアできると考えている。余計なことながら、
今回の日程の六曜はすべて「先負」である。戦後の衆院総選挙の歴史において、3つの六
曜が一致したことは1回もない。果たしてこれはどんな意味を持つことなのだろう？

○近年の解散・総選挙の歴史

解散日	六曜	内閣	命名	総選挙公布日	六曜	総選挙期日	曜日	六曜	定数	投票率
2000年6月2日	大安	森内閣	神の国解散	6月13日(+11)	仏滅	6月25日(+23)	日曜	仏滅	480	62.49
2003年10月10日	大安	第1次小泉内閣	マニフェスト解散	10月28日(+18)	先勝	11月9日(+30)	日曜	先勝	480	59.86
2005年8月8日	仏滅	第2次小泉内閣	郵政解散	8月30日(+22)	友引	9月11日(+34)	日曜	先負	480	62.49
2009年7月21日	先負	麻生内閣	政権選択解散	8月18日(+28)	先負	8月30日(+40)	日曜	大安	480	69.28
2012年11月16日	赤口	野田内閣	近いうち解散	12月4日(+18)	赤口	12月16日(+30)	日曜	友引	480	59.32
2014年11月21日	先勝	第2次安倍内閣	アベノミクス解散	12月2日(+11)	友引	12月14日(+23)	日曜	友引	475	52.66
2017年9月28日	仏滅	第3次安倍内閣	国難突破解散	10月10日(+18日)	仏滅	10月22日(+30日)	日曜	大安	465	53.68
2021年10月14日	大安	第1次岸田内閣	未来選択解散	10月19日(+5日)	仏滅	10月31日(+17日)	日曜	仏滅	465	55.93
2024年10月9日	先負	石破内閣	敵前逃亡解散？	10月15日(+5日)	先負	10月27日(+18日)	日曜	先負	465	？

仮に総選挙を乗り越えられたとして、その先にも多くのハードルが待ち受けていよう。
高市氏を支持した党内右派とは、一種の「遺恨」ができてしまった。トランプ or ハリスと
の日米首脳会談という課題もある。特にトランプ氏を相手に、「日米地位協定」を持ち出
せば、「では日米安保条約を止めよう」と言われてしまいそうである。

そして来年は「巳年選挙」（6月の都議会選+7月の参院選）である。特に参議院選挙で
与党が過半数割れするようなら、「ねじれ国会」の再現となって一大事となる。

幸いなことに、非改選議員（2028年改選組）が自民党62人、公明党が13人と計75人も
いる。来年改選となる自民党52人+公明党14人=66人は、ここから16議席減らしてもま
だ過半数はキープできる。意外とハードルは低いのだ。

つまり来年の夏を越えれば政治は安定する。石破内閣はそこまで到達できるだろうか。

<海外報道ウォッチ>

石破新総裁はどう報じられたか

(観察対象：The Washington Post/ Politico/ FT)

自民党総裁選が終わった先週末、海外メディアは各社各様に新総裁 (=日本の新首相) 誕生を報じている。石破茂氏の人となりについては、“An outspoken former defense minister” (歯に衣着せぬ物言いの元防衛相 = WP)、“67-years-old LDP backbencher and occasional party gadfly” (67歳の自民党無役議員で、党の厄介者でもある = ポリティコ) と紹介しており、「なるほどね」と納得させられる。ただし FT の“a China hawk” (対中タカ派) という評価は、あんまり当たっていないようである。

ワシントンポスト紙からご紹介しよう。9/27 付の“Japan’s ruling party elects Shigeru Ishiba as new prime minister” (日本の与党は新首相に石破茂を選出) ⁴。

- * 石破氏は、国際社会における日本の役割を再構築した岸田文雄氏の後任となる。アジアでは中国が台頭し、同盟を疑問視するトランプ氏の再選もあり得る。かつて安倍首相はお世辞とゴルフで親密な関係を築いたが、今はそんなパイプ役は存在しない。
- * 石破氏は日米同盟において日本がより大きな役割を果たし、発言力を持つべしと唱えている。日米関係の「非対称性」を問題視し、この点で前任の岸田氏と一線を画す。中国と北朝鮮からの脅威に対抗すべく、「アジア版 NATO」の設立を提唱している。ただしワシントンの多くの関係者は、この構想に対して懐疑的である。
- * 日本の有権者は、新しい顔ぶれとアイデアを待ち望んでいる。しかし9人の候補者中、女性は2人、60歳未満も2人だけ、半数以上は父親の選挙区を引き継いでいる。石破氏は党の重鎮を公然と批判してきた。汚職問題の一掃を望む自民党支持層の中ではトップの人気を集める。しかし同じ理由により、同僚議員たちからは嫌われている。
- * 元閣僚の息子であり、父の死後に政界入りした。日本の政治家には珍しく、クリスチャンであることを公言している。日本で人口最小の鳥取県出身。長年にわたって地方活性化を提唱し、東京一極集中の圏外に経済機会を創出することを訴えてきた。

米国から見ると、「優等生」だった岸田氏の後は「困った人」になりそうだ。次にご紹介するポリティコの9/29付記事“What Japan’s New Prime Minister Means for the US”⁵ (日本の新首相が米国に意味すること) は、その辺をさらに詳しく掘り起こしている。

- * 日本の与党は史上最年少首相でも、初の女性首相でもなく、意外な3つ目を選択した。石破氏は日本政治を混乱させ、米国にとって難しいパートナーとなる可能性がある。

⁴ <https://www.washingtonpost.com/world/2024/09/27/japan-new-prime-minister-leader-shigeru-ishiba/>

⁵ <https://www.politico.com/news/magazine/2024/09/29/japans-prime-minister-ishiba-00181546>

- * 他の2人に比べれば無難なチョイスではある。高市氏は右寄り過ぎて靖国神社参拝を公約していたし、43歳の小泉氏は社会的にリベラル過ぎ、かつ経験不足であった。
- * 議員と党員たちは石破氏の高い人気に惚れ込んだ。彼は小泉氏と手を組み、より支持を拡大した。高市氏は故・安倍晋三の後継者を自認する。石破氏は安倍氏のライバルであった。もっとも脱・安倍路線は、中身よりもスタイルに関するものである。
- * 高市氏の敗退が決まった瞬間、官邸内では安堵の声が漏れた。石破氏は岸田首相の後継者と見られ、防衛力増強と日韓関係改善という功績を支持している。日本は対中抑止で重要な役割を担い、岸田氏は頼れるパートナーとして重宝されていた。
- * しかし石破氏は過去の日本の指導者とは違い、一筋縄ではいかない可能性もある。彼は伝統的なエリート層ではない。政策の細部にこだわる頑固者でもある。政府や国会では国民全体ほどは好かれておらず、「大きなビジョンがない」との評もある。
- * 日本研究者のジェリー・カーチスやケン・ワインスタインは、「彼は米国にとって厄介な存在になり得る」と言う。石破氏が日米地位協定の改定を望む理由は、6割は同盟強化のためだが、4割は主権の回復である。そのことが米国を不安にさせる。
- * 日経の秋田浩之氏は「彼が日本のドゴールになることはない」と言う。それでも今回の指導者交代は、これまで穏やかだった日米関係に波風を立てる可能性がある。

あの大人しい日本にも、いずれは自立を目指すドゴール的な指導者が出るかもしれない。米国側にはかねてそんな危惧があったのだろう。「来るべきものが来た」かもしれないが、今はまだ慎重に様子を見よう。日本専門家たちはそう見立てているようだ。

最後に経済面の評価を FT から。9/29 付の”[Shigeru Ishiba’s election as Japan’s next leader expected to rattle stock market](https://www.ft.com/content/124d2193-5c41-409e-87aa-536d86c8bf15)”⁶（日本の次期首相、石破茂が株式市場を攪乱する）。

- * 今週の石破氏勝利を受けて日経平均先物は 6% 下落した。新総裁は日銀の金融政策正常化を支持するが、企業や投資収入への課税強化方針を打ち出している。先週金曜日の株高・円安を見る限り、市場は高市早苗氏の勝利を折り込んでいたようである。
- * 石破氏勝利により、日経平均の上昇トレンドは反転する可能性あり、と株式専門家は警告する。外資も「明確な立場が明らかになるまで、短期的な価格変動が続く」と述べる。石破銘柄としては、防衛や災害救助関連がチャンスを窺っている。
- * それでも与党内の分裂を考えると、石破氏がどれだけ成果を上げられるかは不透明である。党内には重大な経済政策上の相違が存在し、それはまだ解消されていない。

そういえば 3 年前にも「岸田ショック」があった。新首相にとって、株安はいわば通過儀礼みたいなもの。しばらくは片言隻句に振り回される日々が続きそうである。

⁶ <https://www.ft.com/content/124d2193-5c41-409e-87aa-536d86c8bf15>

<From the Editor> 副大統領候補討論会

今週 10 月 1 日（日本時間 10 月 2 日午前）は、米大統領選挙の副大統領候補討論会が行われました。司会は CBS で、場所はニューヨーク。共和党はあの『ヒルビリーエレジー』の著者にして、「孤高のインテリ」JD ヴァンス上院議員（オハイオ州）。民主党からは「愛すべき近所のおじさん」ティム・ウォルズ州知事（ミネソタ州）。無欲さが魅力のウェルズさんは、「米国の森山裕幹事長」と呼ぶのも面白いかもしれませんね。

実はこれが終わってしまうと、11 月 5 日の投票日までにはめばしいイベントがないのです。となると、普段は注目度の低い副大統領候補討論会が、トランプ対ハリスの明暗を分けるかもしれない。ということで、日本では NHK が中継していたのですね。

筆者の判定は「6 対 4 でヴァンス氏の勝ち」でした。ヴァンス氏、カメラをまっすぐに見据えて早口でまくし立てるのですが、多少、怪しい話も含めて自信満々に見えました。対するウォルズ氏は、ときに不安そうな表情が出て押され気味でした。最後の「2020 年選挙の結果を認めるのか」と攻め込んだところは見せ場を作りました。もうちょっと攻撃的になった方が、よかったかもしれませんね。

今日の討論会では、①中東問題、②気候変動、③移民、④景気、⑤指導力、⑥中絶問題、⑦銃規制、⑧インフレ、⑨ヘルスケア、⑩ファミリー・子どもケア、⑪民主主義、と幅広いテーマを取り上げました。両候補はお互いに攻撃しあうのですが、ほとんどの論点で噛み合った議論になっていた点に新鮮な感動がありました。

しかも討論会終了後には、両者は握手を交わし、さらには両夫人も合せて紹介しあっておりました。なんだか麗しい姿に見えたのですが、考えてみたらドナルド・トランプが登場する以前はこれが当たり前だったのですよね。

果たして 2028 年選挙では、再びこれが当たり前になるのでしょうか。そしてウォルズ氏はともかく、ヴァンス氏はいかにも 2028 年選挙に出てきそうですね。

* 次号は 10 月 18 日（金）にお届けいたします。

編集者敬白

本レポートの内容は担当者個人の見解に基づいており、双日株式会社および株式会社双日総合研究所の見解を示すものではありません。ご要望、問い合わせ等は下記までお願いします。

〒100-8691 東京都千代田区内幸町 2-1-1 飯野ビル <http://www.sojitz-soken.com/>

E-mail: yoshizaki.tatsuhiko@sojitz.com